

琉球大学学術リポジトリ

指導要録改訂にともなう通知表改善の実態と課題 －観点別学習状況評価を中心に－

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2007-07-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤原, 幸男, Fujiwara, Yukio メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/1084

指導要録改訂にともなう通知表改善の実態と課題

— 観点別学習状況評価を中心に —

藤原 幸男

Actual Condition and Problem of Improvement of Report Card Attended with Revision of Cumulative Guidance Record

Yukio FUJIWARA *
(Received April 30, 1993)

Summary

Cumulative guidance record was revised in 1991. Attended with this report card in elementary school has been revised. In this paper I stated that the report card of the same model as cumulative guidance record was recommended. And I pointed out several problems of this report card. After that I examined revised report cards in NAHA City and URASOE City of OKINAWA prefecture about evaluation of learning achievement state by several viewpoints.

1 指導要録改訂と通知表改善

1989年に学習指導要領が改訂され、1992年度より新学習指導要領にもとづいた教育課程が実施された。新教育課程の実施にともない、新教育課程にみあった学習や行動の評価のあり方を検討してきた文部省の「指導要録改善調査研究協力者会議」は、1991年3月13日に「審議のまとめ」を発表した。それを受けて文部省は、3月20日、初等中等局長の名で各都道府県教育委員会に指導要録の改訂を通知した。改訂は、都道府県教育委員会の指導助言のもとに、小学校は1992年度から全学年同時に実施、中学校は1991年度より1年生から学年進行で実施されることとなった。前回の改訂は1980年であるから、11年ぶりの改訂である。

今回の改訂においても、指導要録は、児童生徒の学籍並びに指導の過程及び結果の要約を記録し、指導及び外部に対する証明等に役立てるための原簿としての性格をもつものとされた。指導の面においては、新学習指導要領のめざす学力観にたった教育に役立て、児童生徒の一人一人の可能性を積極的に評価し、豊かな自己実現に役立てることに留意して改善された、としている。ここで新学

習指導要領のめざす学力観とは、新学習指導要領・総則編に述べられた「自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力」を根底にすえて、基礎・基本の習得に立ち向かい、自らの個性を生かしていくちからとして学力をとらえ直す学力観である。

この学力観にもとづいて、新指導要録では、「各教科の学習の記録」において、「Ⅰ観点別学習状況」の欄を基本として、「Ⅱ評定」「Ⅲ所見」を併用することにした。「Ⅰ観点別学習状況」の欄では、自ら学ぶ意欲の育成や思考力、判断力などの育成に重点を置いて、観点の配列を改め、「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能・表現」「知識・理解」の順に配列した。「特別活動の記録」では、「Ⅰ活動の状況」で、学級活動、児童（生徒）会活動、クラブ活動及び学校行事の各内容ごとに評価し、「Ⅱ事実および所見」で個性に生かす教育に役立てるという観点から長所を取り上げ記述することにした。「行動の記録」では、「Ⅰ行動の状況」で評価の項目・趣旨を改め、「Ⅱ所見」で同じく個性に生かす教育に役立てるという観点から長所を取り上げ記述することにした、と述べ

* Department of Education, College of Education, University of the Ryukyus.

られている。

新指導要録と「通信簿」との関連については、「取扱い上の注意」の「8その他」において次のように記述されている。

「(2) 指導要録は、一年間の学習指導の過程や成果などを要約して記録するものであり、その様式や記載方法等を学校と保護者との連絡に用いるいわゆる通信簿等にそのまま転用することは必ずしも適切ではないこと。したがって、学校においては、指導要録における各教科等の評価の考え方を踏まえ、児童の学習指導の過程や成果、一人一人の可能性などについて適切に評価し、児童一人一人のその後の学習を支援することに役立つようにする観点から、通信簿の記載内容や方法、様式等について工夫改善すること。」^①

ここであげられている通信簿（通知表、以下通知表という表記を用いる）は公簿ではない。各学校で、学校と保護者との連絡のために、慣習として、自由に作成されてきたものである。指導要録の改訂にともなって、通信簿（通知表）の改善が問題になってきたのである。

2 指導要録とほぼそのままの通知表の推奨

ところで前回の指導要録（1980年改訂）では、指導要録と通知表との関連については、同じ箇所において、「学校と家庭との連絡に用いられる通信簿、家庭連絡簿等は、保護者が児童の学校生活の実情を充分把握できるようにすることが目的であるから、それぞれの学校においては、児童の発達段階や学校の実情を考慮し、適切な記載方法を定めることが必要であり、指導要録の様式や記載方法等をそのまま転用することは必ずしも適当ではないので、注意すること。」^②と述べられていた。

今回の指導要録と比較してみると、前回では保護者の側にとって通知表、家庭連絡簿等の目的を「保護者が児童の学校生活の実情を十分に把握できるようにすること」と明記し、そこから児童の発達段階や学校の実情の考慮が大切であり、「指導要録の様式や記載方法等をそのまま転用することは必ずしも適当ではないので、注意すること」と述べられていた。これに対して今回の指導要録では、「児童の発達段階や学校の事情を考慮し」の部分が消去され、「指導要録における各教科等

の評価の考え方を踏まえ、児童の学習指導の過程や成果、一人一人の可能性などについて適切に評価し、児童一人一人のその後の学習を支援することに役立つようにする観点から」が追加され、「指導要録における評価の考え方を踏まえて」という観点が強調されている。「児童の発達段階や学校の実情を考慮し」の部分の削除とこの強調点の付加は、通知表の改善に何らかの影響を与えるように思われる。

学習指導要領の改訂、指導要録の調査研究の協力に関わった関係者による著者『絶対評価の考え方—新しい学力観と評価観—』（小学館、1992年5月）では、「通信簿と指導要録とは目的や機能を異にするものであり、指導要録の様式や記載方法等をそのまま転用することは必ずしも適切ではありませんが、それを禁止するものではありません」と述べている。転用を「禁止するものではない」ことを明確に述べていることに注目したい。そのうえで、「学校においては、指導要録における各教科等の評価の考え方を踏まえ、児童生徒のその後の学習や生活を支援することに役立つようにする観点から、通信簿の記載内容や方法、様式等について工夫改善する必要があります」と述べられている。^③

文部省内指導要録研究会の監修のもとに指導要録改善調査研究協力者ら（渋谷憲一・石田恒好・高岡浩二）によって書かれた解説書『新指導要録の解説と実務』（図書文化、1991年7月）でも、該当箇所に関して、「この注意書きを素直に読めばわかるように、そのまま転用することは必ずしも適当ではないといっているだけであって、全面的に否定してはない。むしろ慎重に検討したうえで転用することは認めていると読むべきであろう。」と述べている。そして「通信簿の記載内容や方法等を決定するにあたっては、やはり指導要録の内容、方法をみて、できる限り両者が一致し、一貫するようにしたほうがよい。指導要録の内容と評価・記録の方法をできる限り先取りして、通信簿の内容、方法を決めるようにし、それによって通信簿作成と指導要録作成の二元的取扱いや二重の手数をなくすようにするのである。」と述べ、通知表と指導要録の記載内容・方法等の一致を提唱している。^④

熱海則夫・高岡浩二・清水静海『小学校学習評価実践ハンドブック、総論・評価と評価基準』（国土社、1992年2月）では通知表の具体例を示し、「学習のようす」では「観点」別学習状況（◎○△）＋概評（所見の文章記述）、「特別活動のようす」では活動状況（よいものに○）＋事実・所見（文章記述）、「行動のようす」では「めあて」ごとに「めあてに照らしてよいものに○」をつける、簡素化された形式例をあげている。この形式例に対して、同書は「ここで一工夫がほしいのは『観点』の欄である」とし、「指導要録の参考資料で示されている程度の学年段階に即した具体的な内容を示していく工夫が欲しい」と述べている。⁶⁵

こうして、「観点」の欄に指導要録の参考資料（「観点別学習状況評価のための参考資料」）をそ

のまま（あるいは一部削除・修正して）追加掲載した、指導要録とほぼそのままの通知表が推奨されていくことになる。事実、京都府では、京都府小学校校長会の案で指導要録そっくりの通知表案が提示され（表1⁶⁶）、東京都でも、同じく指導要録そっくりの通知表案が提示されている（表2⁶⁷）。小学校校長会での提案という形をとって、指導要録とほぼそのままの通知表が推奨され、各小学校に下ろされようとしているのである。このような動きは全国的なものであろう。このような動きはいまに始まったことではなく、前回の改訂にもみられたが、さきにもた指導要録と通知表の関連についての「注意」によって加速度的に進行しつつあることに注意したい。⁶⁸

表1 「新通知表」（京都府下小学校長会案）（4年）

学 習 の 記 録								
教科	観 点	主 な 内 容	1学期		2学期		3学期	
			学習状況	評定	学習状況	評定	学習状況	評定
国 語	国語への関心・意欲・態度	進んで表現を工夫したり、読書の範囲を拡大しようとする。						
	表 現 の 能 力	要点や中心点を考えて話をしたり文章を書いたりする。						
	理 解 の 能 力	話や文章の要点や中心点を押さえ、段落相互の関係を考えて理解する。						
	言語についての知識・理解・技能	文字、文章、言葉づかいなど言葉に関することがらについて理解している。点画の接し方、交わり方、方向など筆使いに注意して、正しく形を整えて書く。						
社 会	社会的事象への関心・意欲・態度	広い視野から地域の事象に関心をもち、進んで調べ、発展を願う。						
	社会的な思考・判断	地域の事象の特色や関連について考え、適切に判断する。						
	観察・資料活用・技能・表現	地域などの資料を効果的に用いて、過程や結果を分かりやすく表す。						
	社会的事象についての知識・理解	健康や安全を守る活動、地域の地形や産業、先人の働き、国土の特色や特色ある地域の生活の様子を理解している。						
算 数	算数への関心・意欲・態度	筋道を立てて考えたりすることのよさが分かり、進んで活用しようとする。						
	数 学 的 な 考 え 方	数学的な考え方の基礎を身につけ、見通しをもち筋道を立てて考える。						
	数量や図形についての表現・処理	整数や小数などの簡単な計算、簡単な量の測定、基本的な図形調べができ、数量の関係などを表したりよんだりする。						
	数量や図形についての知識・理解	数の表し方や計算の仕方などについて理解を深めるとともに、面積などの求め方、基本的な図形の性質、数量の関係の見方や調べ方を理解している。						

表2 統一型通知表（東京都北区）（3・4年用）

学 習 の 記 録								
観 点 別 学 習 状 況								
教 科	観 点	学習のようす			〈参考資料〉 観 点 の 解 説	評 定		
		一 学 期	二 学 期	三 学 期		一 学 期	二 学 期	三 学 期
国 語	国語への関心・意欲・態度				国語に関心をもち、工夫して表現したり、理解したり、読書の範囲を広げたりしようとする。			
	表現の能力				自分の考えたことを要点・段落・中心点などに気付けて話したり、文章を書いたりする。			
	理解の能力				話や文章の構成に即して、自分の立場から話の要点や中心点を押さえ文章を理解する。			
	言語についての知識・理解・技能				言語の基礎（発音、文字、語句、文、文章、言葉遣い等）について理解し、文字を正しく書く。			
社 会	社会的事象への関心・意欲・態度				地域の社会的事象に関心をもって調べ、地域の一員として自覚をもとうとする。			
	社会的な思考・判断				地域の社会的事象の特色をとらえ、その意味を考え、適切に判断する。			
	観察・資料活用の技能・表現				的確な観察や具体的資料の活用をするともにその成果を分かりやすく表現する。			
	社会的事象についての知識・理解				地域の社会的事象の特色や地域に生きる人々の活動、生活の様子を理解している。			
算 数	算数への関心・意欲・態度				数量や図形に親しみをもち、学習したことを進んで用いようとする。			
	数学的な考え方				数量や図形について、既習の学習をもとにして、見通しをもち筋道を立てて考える。			
	数量や図形についての表現・処理				簡単な計算や適切な計器を用いて測定ができ、数量の関係を式に表したり読んだりできる。			
	数量や図形についての知識・理解				整数の計算の意味、小数・分数の用い方、量の概念、図形の性質などについて理解している。			

小学校校長会提案により、指導要録とほぼそのままの通知表が推奨され、画一的に下ろされ、推奨型通知表に画一的に統一されていくことには、次のような問題がある。⁹⁾

① 学校独自に作成して何ら差し支えない通知表が「第三者」によって作成され、校長会推薦という形で威圧的に強要されることである。

② 児童の発達段階や学校の実情によって異なり、教師の創意工夫によって展開されるべき教育活動が、通知表に記載された観点項目、記述にそって点検・評価され、通知表に記載された観点項目、記述が学校での教育活動を拘束し、画一化してしまうことである。

③ 保護者と子どもにとってみれば、「学習状況の観点」が抽象的で、よく理解できず、「児童の学校生活の実情を十分に把握でき」（前回指導要録）ないということであり、そのために、「評定」での相対評価に関心がいかざるをえないということである。

3 「観点別学習状況評価のための参考資料」と観点別評価

解説書『新指導要録の解説と実務』によれば、「観点別学習状況評価のための参考資料」は、「学

習指導要領に掲げられた目標を各教科、学年ごとに具体化した細目表である¹⁰⁾とされる。学習指導要領における目標自体が目標となりえていないといわれており¹¹⁾、目標それ自体を対象化して検討しなければならないが、ここでは一応それはさておいて、学習指導要領に掲げられた目標がどのように観点別評価項目に細目・具体化されているかを検討したい。この検討をとおして、観点別評価項目設定の特徴が明らかになるように思われるからである。

小学校・国語の観点別学習状況評価の観点（「国語への関心・意欲・態度」「表現の能力」「理解の能力」「言語についての知識・理解・技能」）¹²⁾を小学校学習指導要領・国語科目標¹³⁾と比較してみると、次のことがいえる（論文末掲載の資料1）。

① 小学校学習指導要領・国語科目標では、子どもの国語能力を継続的に発達するものとしてとらえ、各学年ごとの違いを明確にして叙述しているのに対して、観点別学習状況評価の観点では、子どもの発達段階を考慮して、1・2年、3・4年、5・6年をそれぞれひとまとまりにして叙述している。つまり、1・2年は発達の連続していて、2年と3年のあいだには発達の大きな飛躍があるととらえている。

② 観点別学習状況評価の観点では、「表現の能力」の観点において、「この点に留意して〇〇する」という着眼点が欠落している。たとえば小学校学習指導要領・国語科目標〔第1学年〕では、「順序を考えて話したり、文と文とを続けて簡単な文章を書いたりすることができる」（傍線は引用者、以下同様）とあるのに対して、観点別学習状況評価の観点では、「自分の生活における話題や題材について考え、話をしたり簡単な文章を書いたりする」となっている。対象については「自分の生活における話題や題材」と明確に規定されているのに、「どこに気をつけて」という着眼点が抜け落ちている。国語科目標〔第2学年〕では、「事柄の順序がはっきりするように、整理して話したり、語や文の続き方に注意して文章を書いたりすることができる」となっっているのに対して、観点別学習状況評価の観点では、「自分の生活における話題や題材について考え、順序を工夫して話したり書いたりする」というように、順序を工夫して」の着眼点のみにとどまっている。

③ 上記の指摘とも関連して、「関心・意欲・態度」の観点では、小学校学習指導要領・国語科目標〔第3学年～第6学年〕では、「表現」の「関心・意欲・態度」に関して、「分かりやすく表現しようとする態度を育てる」（第3学年）、「内容を整理しながら表現しようとする態度を育てる」（4学年）「相手や場面の状況を考えて表現しようとする態度を育てる」（第5学年）、「適切で効果的な表現をしようとする態度を育てる」（第6学年）となっているのに対して、観点別学習状況評価の観点では、第3学年～第6学年に共通して「進んで表現を工夫したり」となっていて、「表現」の「関心・意欲・態度」に関して学年ごとの違い、したがって指導・評価における留意点が書かれていない。

④ 「言語についての知識・理解・技能」の観点では、小学校学習指導要領・国語科目標にはそれに対応する目標が記述されていなくて、国語科内容において細かく記述されているが、観点別学習状況評価の観点では、「音声、文字、語句、文や文章、言葉遣いなどの国語についての基礎的な事項について理解している。書写では、文字の形、筆順、点画を理解して文字を正しく書く」が第1

学年から第6学年まで同じ記述となっていて、3～4学年ではこれに「正確に」が、5～6学年ではこれに「深く」が付け加わっている。これでは、各学年における指導・評価の内容的な重点が示されず、言語事項の知識・理解・技能の内容的な系統的発展が読み取れないことになる。

以上のことをまとめると、次のようにいえる。観点別学習状況評価の観点では、「理解の能力」という観点を除いて、指導・評価の着眼点が具体的に示されず、いっそう抽象化された方向目標の性格を強めている。さらに、学年を追うにつれての系統的発展が低学年、中学年、高学年にまとめて記述されている一方で、「言語についての知識・理解・技能」では第1学年から第6学年までほぼ同じ記述になっていて、この観点についての内容上の系統的発展を放棄したとしか思えない記述も存在する。

このような特徴は国語科だけのものなのか。他の教科ではどうなっているか。そこで算数科を取り上げて、小学校・算数の観点別学習状況評価の観点（「算数への関心・意欲・態度」「数学的な考え方」「数量や図形についての表現・処理」「数量や図形についての知識・理解」¹⁰）を小学校学習指導要領・算数科目標¹¹と比較してみると、次のことがいえる（論文未掲載の資料2）。

① 学習指導要領・算数科目標では、子どもの算数能力を継続的に発達するものとしてとらえ、各学年ごとの違いを明確にして叙述しているのに対して、観点別学習状況評価の観点では、子どもの発達段階を考慮して、1・2年、3・4年、5・6年をひとまとまりにして叙述している。つまり、1・2年は発達の連続性で、2年と3年のあいだには発達の大きな飛躍があるととらえている。この点は国語科の場合と同様である。

② 観点別学習状況評価の観点では、「簡単な計算ができ」、「簡単な量を測定したり」、「基本的な図形を測定したり」という記述になっているが、これでは何についての計算なのか、簡単な量とは何を指しているのか、基本的な図形とは何を指しているのか、が具体的に示されていない。それに対して、小学校学習指導要領・算数科目標では「何についての〇〇」かが明瞭に記述されている。

③ 観点別学習状況評価の観点では、第1～2

学年における「数学的な考え方」の観点で、「数理的な処理に親しむ」という叙述があるが、「数理的処理」の意味内容が不明瞭で、この叙述は適切でない。保護者への連絡簿としての通知表にそのまま記載されると、問題がある。

以上の算数科での検討をとおして、国語科ほどではないにしても、観点別目標が抽象化される傾向にあるといえる。「○○についての△△」が示されず具体性に欠けること、「数理的処理」という特有の表現が用いられていることなどがみられる。

こうしてみると、「観点別学習状況評価のための参考資料」は、解説書『新指導要録の解説と実務』のいうように、「学習指導要領に掲げられた目標を各教科、学年ごとに具体化した細目表である」とだけ述べてすませるわけにはいかない。観点別学習状況評価の観点は、学習指導要領・目標記述よりも記述をいっそう抽象化しており、到達点を明確にした到達目標から目標方向だけを述べた方向目標への離脱を図っているといわざるをえない。

4 観点別学習状況評価の実態と課題

今回の新指導要録では、学習の記録では観点別評価が基本で、評定、所見を併用することとなった。これを受けて、各小学校では通知表の改善に取り組んできた。その成果として、1992年度より、通知表の内容・形式が大きく変更されてきている。以下では、沖縄県那覇市・浦添市地区における小学校の場合を取り上げて、観点別学習状況評価の観点記述の実態と課題をみていくことにする。

その際、沖教組那覇支部教育研究集会「能力・発達・学習と評価」分科会（1992年10月31日）での報告資料『『指導要録』改訂と関連して『通知表』はどう改善されたか』を用いる。報告者（仲松泰子）は那覇市・浦添市地区小学校（全部で43校）の通知表を18校分集めた。この報告資料にはそのうち、小学校1年・12校、小学校4年・11校分の通知表（複写）が収録されている。その後、6年の通知表・9校分を個人的に複写していただいたので、それを合わせて用いることにする。

(1) 「学習のようす」の評価のタイプ

上記資料における通知表を見ると、評定のものはない。評定に所見を組み合わせたもの、または観点別学習状況に所見を組み合わせたものが

多い。4年、6年では、観点別学習状況+評定+所見が増えている。全体的に、観点別学習状況に◎○△をつけるにとどめず、そしてまた絶対評価を加味した相対評価にとどめず、教師の日頃の観察をもとにした、所見記述で補っているといえる(表3)。

表3 「学習のようす」の評価タイプ

「学習のようす」の評価タイプ	1年	2年	3年
評定のみ	0校	0校	0校
評定+所見	0校	5校	4校
観点別学習状況のみ	4校	0校	0校
観点別学習状況+評定	0校	1校	0校
観点別学習状況+所見	7校	2校	2校
観点別学習状況+評定+所見	1校	3校	3校
計	12校	11校	9校

① 1年の分析

1年では、入門期でもあり、ほとんどの学校で観点別学習状況の評価項目を文章で記述している。これらの学校では、いずれも評定はしていない。観点別学習状況評価のみが4校、観点別学習状況評価に所見を組み合わせているものが7校ある。観点別学習状況+評定+所見として1校あげたが、そこでは変則的で、一学期は発達の配慮をし、国語・算数について観点別評価を4～5項目文章で記述し、◎○△で評価する形式をとり、二学期・三学期においては「所見」項目で国語・算数・音楽・図工・体育について各1項目取り出し、◎○△で評価し、各教科について評定と学期ごとの所見をつける形式を採用している。

観点別学習状況評価を全面的に採用している学校のうち、一学期は国語・算数のみ観点別に評価する学校が4校あり、また、一学期は生活科は評価の対象にいれていない学校も1校ある。1年においては、指導要録において三段階評定はなされておらず、各学校では、観点別項目による評価だけで行うのが望ましいことではほぼ一致しているようである。また、1年の一学期はどのような観点別評価が望ましいかは、今のところ手さぐりの状

況にある。大胆に研究的に構想し、保護者・子どもの意見・感想を取り入れて良いものを創りだしていく必要がある。

「教科の学習のようす」以外に、学習態度に関する項目を取り出し、①「生活のようす」の「学習面」「学習態度」にまとめて記述し、評価しているもの（3校）、②「〇がっきのちから」という大項目のもとに「がくしゅうのちから」と並んで「がくしゅうのようす」を置いて、学習態度に関する項目を5項目ほど文章で記述をしているもの（1校）がある。学習態度の問題は教科共通の側面を含んでいるので、上記のように、「生活のようす」の「学習面」「学習態度」にまとめて取り上げ、評価するか、あるいは教科共通の形でまとめて評価することが望ましい。

② 4年の分析

観点別項目の記述を加えた評定+所見のタイプ、評定+所見のタイプを合わせて5校で、45%に達する。沖縄県の場合、観点別学習状況の評価による通知表はまだ本格的に始動していないようである。観点別学習状況の評価と評定を併用しているのは1校である。観点別学習状況の評価と評定を併用し、各学期ごとに両者を記述し、それに所見を加えているのは3校である。観点別達成状況の評価+所見のものは2校である。全体的に、観点別学習状況の評価に評定を併用したタイプが多い。この併用タイプはいずれも各学期併用を採用しているが、この形式ではどうしても評定に目がいきやすいこと、そして指導要録は年一回つけることを考えれば、学年末においてのみ評定をつける形式も考えられてよい。現に、評定については学年末のみ行っている学校もあるので、今後の研究課題にしてほしいと考える。⁹⁹

「教科の学習のようす」以外に、「学習のようす」欄を設けて、学習態度に関する項目を取り出し項目別に記述しているのは、4校である。これも1年のところで指摘したのと同じく、学習態度の問題は教科共通の側面を含んでいるのでこのような形が望ましい。

③ 6年の分析

観点別項目の記述を加えた評定+所見のタイプ、評定+所見タイプを合わせて4校で、45%に達する。4年と同じく、沖縄県の場合、観点別評価に

よる通知表はまだ本格的に始動していないようである。観点別達成状況の評価と評定を併用し、各学期ごとに両者を記述し、それに所見を併用しているのは3校である。観点別学習状況の評価+所見のものは2校である。比較的、観点別学習状況に評定を併用したタイプが多い。4年の分析のところで指摘したように、各学期ごとに評定を記述するのではなく、学年末に一括評定することも考えられてよい。

「教科の学習のようす」以外に、「学習のようす」欄を設けて、学習態度に関する項目を取り出し項目別に記述しているのは、4校である。これも、すでに1年・4年のところで指摘したように、学習態度の問題は教科共通の側面を含んでいるのでこのような形が望ましいと考える。

④ 学校別の分析

同じ学校でも4年は観点別項目の記述を加えた評定+所見のタイプ、6年は評定+所見のタイプがある。1年の観点別評価項目を立て項目ごとに評価しているが、4年は観点別項目の記述を加えた評定+所見タイプの学校もある（2校）。1年は観点別評価項目を立て項目ごとに評価し、所見を加えているが、4年・6年は評定+所見タイプもある。1年は観点別評価項目を立て項目ごとに評価し、所見を加えているが、4年・6年は観点別評価+評定+所見のタイプの学校もある。発達段階によるものなのかどうかは検討してみなければならないが、いずれにせよ、さほど多くないにせよ、学年によって違いのみられる学校がある。通知表の趣旨を踏まえ、学年ごとに教師間で話し合っじっくりと研究・検討し、独自に作成することは可能であるし、大切である。まずは学年教師集団で通知表改善について話し合い、改善の研究を進めていくことが大切である。

(2) 観点別学習状況評価のタイプ別分析

表4から、多くの通知表が観点別学習状況評価を積極的に受けとめ、通知表に取り入れていることがわかる。しかし、記述の内容・形式にちがいがみられる。大きくは、次のように区分できる。一つには、(1)では「評定+所見」のタイプに入れたが、観点別項目の記述はだしているがそれについて記入する欄がなく、結局のところ評定のみをつけることにとどまっているタイプ（Aタイプ）

である。二つには、指導要録の記述をもとに各教科の観点別に一項目ずつを取り出して、それぞれに各学期評価していくタイプ（Bタイプ）、三つには、観点別評価（「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能・表現」「知識・理解」）の視点を取り入れながら単元・教材での具体的学習内容に即して記述しているものと、観点別評価（「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能・表現」「知識・理解」）の視点をあまり考えずに、単元・教材での具体的学習内容に即して記述しているものがあるが、いずれも具体的でわかりやすい記述に努めているタイプ（Cタイプ）である。

タイプごとの数量分布は、表4のとおりである。これによれば、低学年ではすべてCタイプであり、中学年でAタイプ・Bタイプが見られる。低学年においてすべてCタイプである理由として、一つには発達段階からみて具体的な観点別評価が望ましいことが共通理解されていること、そして観点別評価が比較的容易であることが考えられる。これに対して、中学年、高学年において比較的Cタイプが減少している理由として、発達段階からみて抽象的表現でも理解可能という見方があること、そして低学年に比べて、観点別評価の文章記述が困難で、文章記述の実践的研究が遅れていることが考えられる。

表4 観点別学習状況評価のタイプ別分析

諸タイプ	1年	4年	6年
Aタイプ	0校	3校	1校
Bタイプ	0校	1校	1校
Cタイプ	11校	5校	4校

① Aタイプ

Aタイプには、「教科の観点」の記述欄に「観点別学習状況評価のための参考資料」の文章をそのままそっくり掲載しているもの（a校〈表5〉）と、若干修正して掲載しているもの（b校〈表6〉）がある。比較すると、b校の文章記述の方が保護者にわかりやすいが、いずれも項目ごとの評価欄が

なく、評定欄で評定をつけるようになっている。そのため、「教科の観点」は知ることができて、「教科の観点」のうちどれが達成されていて、どれが未達成なのかがわからない。今後どこに気をつけて学習すればよいか、どこに力を傾ければよいか、保護者と子どもに伝わらない。結局のところ、保護者と子どもの関心は従来と同じく三段階評価に行ってしまう。これでは、観点別評価の趣旨が生かされない。関係者の話を伝え聞くと、学校での通知表改善の研究体制の推進が遅れ、1992年度の新通知表には間に合わなかったとのことである。今後、以下のBタイプ、Cタイプに移行していくものと思われる。

② Bタイプ

Bタイプ（c校〈表7〉）では、各観点一項目に限定されているために、視覚的に読みやすいという利点はある。しかし文章記述は概括的である。実際の教授＝学習活動では特定の学習事象に即して学んでいるのだが、この観点別評価では、たとえば社会では、「地域社会における人々の活動」、算数では「数量・図形」、理科では「自然の事物・現象」といったように、概括的な表記がされている。しかも一～三学期が同じ文章記述なので学習内容の発展が読みにくく、学習内容との関わりで観点別評価という観点からは理解しにくいものとならざるをえない。学習内容に即して具体化されないと、保護者・子どもにとって理解できるのは三段階評定だけであり、そこに関心が集まってしまう。それでは、指導要録の観点別評価が基本で評定・所見を併用するという趣旨が通知表に生かされず、実質的には評定が基本で、観点別評価を併用することになってしまう。保護者・子どもにとって親切な通知表ではなく、改善の必要がある。少なくとも、学期ごとに観点をだして学期ごとに評価することが必要である。

③ Cタイプ

Cタイプ（d校〈表8〉、e校〈表9〉f校〈表10〉）は、「評価の観点」が学習単元の内容にそってかなり具体的に示され、わかりやすい。各教科の観点別評価項目数を限定せず、教科によっては8項目もある。また学期ごとに「評価の観点」がだされ、評価されていくので、学習内容の発展が読みとれるという利点もある。

表5 観点別学習状況評価・Aタイプ（a校）（小学校4年）

		学 習 の よ う す						
教科	教科の観点	評価	1 努力を要する			一学期	二学期	三学期
			2 普通	3 よ	通い			
国語	<ul style="list-style-type: none"> ・国語に対する関心を持ち、進んで表現を工夫したり、読書の範囲を広げたりしようとする。 ・身近な生活における話題や題材について自分の考えをまとめ、要点や中心点を考えて話をしたり文章を書いたりする。 ・構成に即して、自分の立場から話の要点や中心点を押さえ文章の段落相互の関係を考え、理解する。 ・音声、文字、語句、文や文章、言葉遣いなどの基礎的な事項について理解している。書写で文字の大きさ、配列、毛筆では点画の接し方、交わり方、方向を理解して文字を正しく書く。 							
社会	<ul style="list-style-type: none"> ・広い視野から、地域の社会的事象に関心を持ち、意欲的に調べることを通して、地域社会の発展を願いその成員としての自覚をもとうとする。 ・地域の社会的事象の特色や社会的事象相互の関連について考え、適切に判断する。 ・地図や各種の資料を効果的に活用し、その過程や結果についてわかりやすく表現する。 ・健康や安全を守る諸活動、地域の地形や産業の様子及び地域の発展に貢献した先人の働き及び国土の特色や特色ある地域における生活の様子を理解している。 							
算数	<ul style="list-style-type: none"> ・知識や技能などの有用さ、及び数量や図形の性質や関係を調べたり筋道を立てて考えたりすることのよさが分かり、進んで生活に生かそうとする。 ・知識と技能の習得や活用を通して数学的な考え方の基礎を身に付け、事象について見通しをもち筋道を立てて考える。 ・整数や小数などの簡単な計算ができ、それらを目的に応じて適切に用いたり、簡単な量を測定したりするとともに、基本的な図形を調べたり、数量の関係を表したりよんだりする。 ・記数法や計算の性質などについての理解を深めるとともに、面積などの求め方、基本的な図形の性質、数量の関係の見方や調べ方を理解している。 							
理科	<ul style="list-style-type: none"> ・自然事象に興味・関心をもって追究し、生物を愛護するとともに、みいだした特性を生活に生かそうとする。 ・自然事象の変化とその要因とのかかわりに問題を見だし、変化に見られる因果関係をとらえ、問題を解決する。 ・簡単な器具や材料を見つけたり、使ったり、作ったりして観察や実験を行い、その過程や結果を分かりやすく表現する。 ・生物の活動や成長の仕方は環境条件と関係があることや、物質の変化には外的条件が関係していること、水は土地を変化させたり、気象変化の原因となったりすることなどを理解している。 							

表6 観点別学習状況評価・Aタイプ（b校）（小学校4年）

		学 習 の よ う す									
評価の段階	教科	教科の観点 (各教科の主な学習内容)	1 学期			2 学期			3 学期		
			がんばってほしい	でききる	よくできる	がんばってほしい	でききる	よくできる	がんばってほしい	でききる	よくできる
国語		<ul style="list-style-type: none"> ・進んで表現を工夫したり、読書の範囲を広げたりする。 ・内容の要点や中心をを考えて文章を書く。 ・相手や場に応じて内容の軽重を考えて話す。 ・話の要点や中心点を書きとめながら、正確に聞き取る。 ・音声や文字や語句などの国語についての基礎的な事項が正確に分かる。 									
社会		<ul style="list-style-type: none"> ・地域の生活を守る働き、先人の業績、他地域の生活の様子に関心をもつ。 ・地域を調査し、地図やその他の資料を活用し、表現する。 ・健康・安全を守る仕組み、地域の地形・産業の様子、国土の特色が分かる 									
算数		<ul style="list-style-type: none"> ・数学的な考え方の基礎を身に付け、見通しをもち筋道を立てて考える。 ・数の計算、量の測定、作図、グラフのよみかきなどができる。 ・数、量、図形の概念及び計算や測量の意味、数量関係の見方などが分かる。 									
理科		<ul style="list-style-type: none"> ・自然のことがらに興味・関心を持ち、進んで問題を追究する。 ・器具や材料を使って観察や実験をし、調べたことを絵や文で表す。 ・自然の働き、変化の様子が分かる。 									

表7 観点別学習状況評価・Bタイプ（c校）（小学校4年）

教科	評 価 の 観 点	学 期					
		1		2		3	
		評 価	評 定	評 価	評 定	評 価	評 定
国 語	国語に関心を持ち、いろいろな本を読み自分の考えを深めようとする。						
	自分の考えをまとめ、相手にわかるように話をしたり、文章に書いたりすることができる。						
	文章の要点を読みとることができる。						
	文字・文章・言葉遣い・話の聞き方などについて正確に理解し、文字を正しく書くことができる。						
社 会	地域社会における人々の活動とその地域・国土の特色に関心をもって調べようとする。						
	統計やグラフなどに興味を持ち、これらの資料を関連させて、自分なりの考えをもつことができる。						
	地図や資料などを活用し、調べたことをわかりやすく表すことができる。						
	地域社会の人々の活動(先人の働き)・国土の特色・特色ある地域の様子を関連させて理解できる。						
算 数	数量・図形に関心を持ち、数による処理のよさがわかり、進んで生活に生かそうとする。						
	数量・図形について見通しや筋道をたてて考えることができる。						
	数量・図形についての表現や処理の技能を身につけている。						
	数量・図形の性質などについて理解している。						
理 科	自然に親しみ、意欲をもって自然の事物・事象を調べようとし、自然を愛護しようとする。						
	自然事象を比較したり関係づけたりしながら、問題を発見し解決することができる。						
	簡単な器具や材料などを使って観察や実験を行い、その過程や結果を的確に表現することができる。						
	自然事象の特徴や相互関係、規則性などについて理解している。						

表8 観点別学習状況評価・Cタイプ（d校）（小学校4年）

教科	評価の観点	達成状況	
		◎……よい	○……ふつう △……がんばってほしい
国語	<ul style="list-style-type: none"> ・書くことと中心点に分かるように、事柄ごとのまとまりとつながりを考えて文章を書くことができる。 ・文章を叙述に即して読み、段落相互の関係を考えて、中心点を正しく読み取ったり、場面の様子や人物の気持ちを読みとったりすることができる。 		
	<ul style="list-style-type: none"> ・学習した漢字を読み、正しく書くことができる。 ・読書に親しみいろいろな読み物を進んで読むことができる。 		
社会	<ul style="list-style-type: none"> ・健康で安全な生活を守るための事業や諸機関に関心をもち、進んで調べることができる。 ・ごみ処理・水資源の確保や開発について理解し、生活を見直すことができる。 ・人々の生命や財産を守るためのけいさつ署、消防署などの協力的・計画的な活動がわかる。 		
	<ul style="list-style-type: none"> ・大きな数(10万～兆の位)のしくみが分かり、読んだり書いたりできる。 ・角について分かり、角の大きさを測ったり、書いたりできる。 ・空位や末尾に0のあるかけ算の筆算ができる。 		
	<ul style="list-style-type: none"> ・2、3位数で割る割り算の筆算ができる。 ・1000分の1の位までの数を単位と結びつけてとらえ、小数のたし算、ひき算ができる。 ・学習した事を生かし、資料を整理したり、まとまりを考えたりして文章題を解くことができる。 		
理科	<ul style="list-style-type: none"> ・生物や自然のできごとに関心をもち、進んで世話や観察をしようとする。 ・電流の大きさや、流れる向きについて考えることができる。 ・実験、観察を正しくすることができる。 ・一日の動植物の変化の様子を観察し、気温や天気による変化を考えることができる。 		

表9 観点別学習状況評価・Cタイプ（e校）（小学校4年）

1 学期

教科	評価の観点	達成状況	評定
社会	<ul style="list-style-type: none"> ・健康な生活を保っていくためのゴミの収集や処理のしかたがわかる。 ・健康な生活を保っていくための水資源の確保や開発についてわかる。 ・消防活動の学習を通して、生命や財産を守るための協力的・計画的活動がわかる。 ・地域社会の動きについてグラフ・表などの資料を読みとることができる。 		
算数	<ul style="list-style-type: none"> ・3桁をかけるかけ算ができる。 ・大きな数(10万～兆の位)のしくみがわかり、読んだり書いたりできる。 ・角についてわかり、角の大きさをはかたり、かいたりできる。 ・□、○を使って式に表し、対応する数を調べることができる。 ・2桁、3桁のわり算のひっ算ができる。 ・折れ線グラフを読んだりかいたりできる。 ・四捨五入による概算のとり方がわかる 		

理科	植物の成長や動物の活動は、天気や時刻によって違いがあること、暖かい季節、寒い季節などによって違いがあることがわかる。	
	乾電池の数やつなぎ方によって豆電球の明るさやモーターの回り方が変わることがわかる。	
	人の脈拍や体温は運動などによって変化するが、安静時には、ほぼ一定に保たれていることがわかる。	
	簡単な器具(電流計・乾電池・体温計・ストップウォッチ等)を使って安全に観察・実験ができる。身近な動植物や自然に関心を持ち、すすんで世話や観察をしようとする。	

表10 観点別学習状況評価・Cタイプ(f校)(小学校4年)1学期

教科	評価の観点	達成状況	評定
国語	読書に親しみ、いろいろな読み物をすすんで読むことができる。		
	自分の考えがよくわかるように書きたいこと(中心点)をはっきりさせ、順序や内容の軽重を考え、整理して書くことができる。		
	「しまりすの春」「走れ」「かめのこせんべい」を読み、人物の気持ちの変化や場面の移り変わりを想像しながら読みとることができる。		
	「昆虫のなぞを追って」で文章のまとまりとつながりを考えて、大事な事柄をまとめたり、細い点にも注意しながら文章を読みとることができる。		
社会	物語など場面の様子や、人物の気持ちの変化が聞き手にもよく伝わるように音読することができる。		
	学習した漢字を読み、正しく書くことができる。		
算数	点画の接し方、交わり方、形の大きさ、配列に注意して正しく書くことができる。		
	健康や安全を守るための働きに関心を持ち、進んで調べ新聞や紙芝居に表すことができる。		
	消防署や警察署などの働きとしくみについて考えることができる。		
	地図、グラフ統計資料を活用して、水資源の確保や飲料水が届くまでの様子をとらえることができる。		
理科	ごみ処理の仕方とごみの再利用のされ方がわかる。		
	意欲をもって問題に取り組むことができる。		
	学習した事(かけ算やわり算等)を使って、文章題を解くことができる。		
	(3けた)×(3けた)のかけ算のひっ算ができる。		
	角についてわかり、角の大きさをはかったり、書いたりできる。		
	2・3位数でわるわり算のひっ算ができる。		
理科	大きな数のしくみがわかり、読んだり書いたりできる。又、四捨五入による概数がわかる。		
	2つの数量の関係を式に表したり、変わり方を調べる。又、折れ線グラフを書くことができる。		
	継続的な観察・実験を通して季節や時刻、天気による動植物の成長や活動の様子を進んで調べようとする。		
	人の運動前後の脈拍数や体温の測定結果から、安静時には、ほぼ一定に保たれていると考えることができる。		
理科	草木の成長を続けて観察していくこと、乾電池や光電気を使って、モーターがはやく回る工夫をすることができる。		
	動植物の運動・成長・活動は、季節、天候、時刻によって違うこと、乾電池や光電池の特性や電気のはたらきがわかる。		

しかしよく見ると、それぞれに記述の仕方にちがいがあがる。そうしたちがいがわかりやすさの上でのちがいとなって現れるように思われる。

d校では、全体的にはすぐれているのだが、一部において、一つの記述文のなかに複数の観点内容が含まれている。また一部において、いくつかの学習単元の内容を一つの文章記述のなかにもりこんでいて、その内容を達成したかどうか不明瞭になる恐れもある。もちろん教科によって、ち

がいがあがる。算数と理科は学習単元の題目と内容を明確に示して、すぐれている。

e校では、c校と比べると、一つの記述文に一つの観点内容を述べる原則でほぼ貫かれている。そのため、項目の数は多くなるが、それぞれの達成度を明確化しやすいように思われる。このことは、とくに国語、社会において明瞭に現れている。理科では「○○は△△である」ことがわかる、という形で述べられていて、学習内容のポイント

をいっそう具体的に知ることができるようになっていく。

f校での通知表は、「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能・表現」「知識・理解」の観点で観点別評価をするにしても、単元・教材の学習内容に即して記述するとずいぶんわかりやすい文章記述ができることを教えてくれている。国語では、「〈しまりすの春」「走れ」「かめのこせんべい」を読み）や「〈昆虫の謎を追って」で」という形で、その学期で学習する単元をあげ、その単元においてこの観点を評価するということが明確に示されている。このやり方は単元にそって観点をみていくことに役立ち、日常の学習活動とつながり、保護者・子どもにとってもわかりやすいものとなっている。観点評価の内容を学習活動に即して具体的に記述していて、観点別評価における今後の一つの記述方向を示しているように思われる。「社会」「理科」では、学習単元の内容にそってという点ではまだ十分ではないが、「関心・意欲・態度」の記述において工夫がみられる。各学期で必ずしもできているわけではないが、「関心・意欲・態度」において、「健康や安全を守るための働きに関心を持ち、進んで調べ新聞や紙芝居に表すことができる」や「継続的な観察・実験を通して季節や時刻、天気による動植物の成長や活動の様子を進んで調べようとする」のように、「関心・意欲・態度」をかたむける学習対象を明示し、学習対象への取り組み方、つまり「思考・判断」「技能・表現」と結びつけて観点別評価の文章記述をしている。「関心・意欲・態度」の評価が方向目標にならざるを得ないとしても、このような形で明確化・具体化することは可能だし、そのことによってかなり到達目標に近い形を生み出していくことができることに注目したい。

また、f校では、これもすべての観点評価項目でできているわけではないが、国語「読書に親しみ、いろいろな読み物をすすんで読むことができる」（一学期）→「読書に親しみ、いろいろな読み物をすすんで読み、読書記録をとることができる」（二学期）、算数「意欲を持って問題に取り組むことができる」（一学期）→「いろいろな考え方を使って、問題に取り組むことができる」（二学期）、音楽「曲の流れやフレーズを感じとって

音楽を親しむことができる」（一学期）→「曲の流れやフレーズを感じとったり、身体表現をしたりして音楽を楽しむことができる」（二学期）というように、観点内容の系統的発展を意識して文章記述している。このような記述であれば、この学期では前学期と比べて、どこを発展させるのか、どこに重点をおいて学習すればよいかが教師・保護者・子どもに明確になり、教育的評価の役割を十分に果たすことができるように思われる。

ただし、観点項目が多くなると煩雑さを免れない。また、観点の文章記述が「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能・表現」「知識・理解」の形でまとめられているとはいいいがたく、それぞれにまとめて整理して記述することが必要になる。この点が、e校の通知表改善における今後の研究課題だと思われる。

注

- (1) 『小・中学校指導要録—全文と改訂の解説—』明治図書、1991年9月、49～50ページ。
- (2) 『小学校児童 新・指導要録の記入例と用語例』図書文化、1980年5月、32ページ。
- (3) 奥田真丈・高岡浩二・島津忍・中西朗『絶対評価の考え方』小学館、1992年5月、32ページ。
- (4) 渋谷憲一・石田恒好・高岡浩二『新指導要録の解説と実務』図書文化、1991年7月、224～225ページ。該当箇所は、石田恒好の執筆と思われる（石田恒好『個性を生かす新通信簿』1992年4月、34ページに同一の記述がある）。
- (5) 熱海則夫・高岡浩二・清水静海『小学校学習評価実践ハンドブック、総論・評価と評価基準』国土社、1992年2月、142ページ。
- (6) 白根俊之「『新学力観』と通知表画一化の実態」『教育』1992年10月号、国土社、39ページ。春日井敏之「通知表はだれのために—京都での『あゆみ』画一化と『新学力観』—」『生活指導』1993年2月号によれば、独自に作成された学期ごとの観点別評価による通知表、到達度評価による通知表を作成した学校に対して、現在、二学期から三学期にかけて、『府下校長会案』での年度途中からの変更を強制するという、きわめて異常な状況がひき起こされている」という（同論文、57ページ）。京都府のある学校では、

三学年三クラスの教諭が二学期末に、意欲・判断・表現・理解の4観点による評価でつけた新通知表（「府下校長会案」）とは別に、独自の通知表を「補助資料」として配り、二つの通知表に対する父母の評価が分かれているという。市教委は「校長の許可を得ていなかった」として三人の教諭の処分を検討している、と報道されている（「朝日新聞」1993年2月13日付）。

- (7) 高村明弘「学校独自の通知表を一新指導要録そのまま通知表一」『現代と教育』24号、桐書房、1992年12月、43ページ。
- (8) 室井修は、「通知や通達による行政がわが国においては、特異な強制力を行使しており、とくに教育行政の場面では、文部省と教育委員会あるいは教育委員会と学校との間で強い規制関係を生じさせるものとして受けとられている現実がある」と述べている（室井修「改訂指導要録の問題点—教育行政の原理に照らして—」『教育目標・評価学会紀要』第2号、1992年12月、1ページ）。指導要録改訂・通達の諸解説書は事実上の規制力を持ち、地方レベルにおいては、本来各学校で自由に決定できる通知表を諸解説書の推奨型に統一させる規制作用を内在させているといつてよい。
- (9) ①②については、大津悦夫「通信簿改善のすすめ方」『到達度評価』3号、明治図書、1984年9月、70ページを参照。
- (10) 渋谷憲一・石田恒好・高岡浩二、前掲(4)、100ページ。
- (11) 長尾彰夫『新カリキュラム論』有斐閣、1989年によれば、「指導要録での『目標』は、個々の教科内容を直接とりあげ、その達成の様態を明示するといったことよりはむしろ、教科内容を扱っていくうえでの観点、いわば指導のあり方、方向を示すという形で設定されている」とみられる。
- (12) 前掲(1)、52～53ページ
- (13) 文部省『小学校学習指導要領』、大蔵省印刷局、1989年3月、5～21ページ。
- (14) 前掲(1)、56～57ページ。
- (15) 前掲(12)、38～55ページ
- (16) 神奈川県川崎市立橋小学校の新成績表では、「総合」という形で学年末に評定を入れている。

「朝日新聞」東京版、1992年8月3日付。

参考文献

- ① 『小・中学校指導要録—全文と改訂の解説—』明治図書、1991年5月。
- ② 「新指導要録全文（幼小中養）と要点解説」『教職研修』1991年5月増刊号。
- ③ 梶原康史編『小学校改訂指導要録の解説と記入例』明治図書、1991年6月。
- ④ 渋谷憲一・石田恒好・高岡浩二『小学校児童・新指導要録の解説と実務』図書文化、1991年7月。
- ⑤ 北尾倫彦編『小学校指導要録・通信簿の記入例と用語例』国土社、1992年1月。
- ⑥ 奥田真丈・高岡浩二・島津忍・中西朗『絶対評価の考え方』小学館、1992年5月。
- ⑦ 石田恒好『個性を生かす新通信簿』図書文化、1992年4月。
- ⑧ 渡部邦雄・織井道雄・宮本一史編『小学校通信簿の記入文例』文教書院、1992年5月。
- ⑨ 熱海則夫・高岡浩二・清水静海『小学校学習評価実践ハンドブック、総論、評価と評価基準』国土社、1992年4月。
- ⑩ 『教職研修総合特集2、新評価活動読本』教育開発研究所、1991年7月。
- ⑪ 『教職研修総合特集89、新指導要録実務読本』教育開発研究所、1992年3月。
- ⑫ 「特集、テストづくりと通信簿の改善」、全国到達度評価研究会編『到達度評価』第3号、明治図書、1984年9月。
- ⑬ 稲葉宏雄他『現代教育と評価2、教育目標・教育実践と教育評価』日本標準、1984年10月。
- ⑭ 全国到達度評価研究会編『だれでもできる到達度評価入門』あゆみ出版、1989年8月。
- ⑮ 全国到達度評価研究会編『これからの通知表・学級通信』あゆみ出版、1991年5月。
- ⑯ 小川修一・志賀広夫・行田稔彦編『子どもの側にたつ評価、小学1・2年』民衆社、1992年8月。
- ⑰ 小川修一・志賀広夫・行田稔彦編『子どもの側にたつ評価、小学3・4年』民衆社、1992年12月。
- ⑱ 小川修一・志賀広夫・行田稔彦編『子どもの

側にたつ評価、小学5・6年』民衆社、1993年3月。

- ⑲ 長尾彰夫『通信簿と教育評価』有斐閣、1985年11月。
- ⑳ 梶田毅一『教育評価（第2版）』有斐閣、1992年9月。
- ㉑ 「特集、新学習指導要領の学力観」『教育』1992年10月号。
- ㉒ 「特集、『新学力観の通信簿』全国最新情報」『学校運営研究』1992年10月号。
- ㉓ 「特集、『絶対評価』による新通知表の検討」『現代教育科学』1992年12月号。
- ㉔ 「特集、新学力『関心・意欲・態度』評価の工夫」『教育科学・国語教育』1992年12月号。
- ㉕ 「特集、新学力『関心・意欲・態度』評価の開発」『教育科学・社会科教育』1992年12月号。
- ㉖ 「特集、『関心・意欲・態度』評価技法の開発」『楽しい理科授業』1992年12月号。
- ㉗ 「特集、評価と通知表—悩むあなたにズバリ回答」『生活科授業研究』1992年12月号。
- ㉘ 『教育目標・評価学会紀要』創刊号、教育目標・評価学会、1991年。
- ㉙ 『教育目標・評価学会紀要』第2号、教育目標・評価学会、1992年12月。

資料 1 「観点別学習状況評価のための参考資料」と「小学校学習指導要領・目標」(小学校国語)

(国語) 小学校児童指導要録付属資料

観点	第 1 学 年	第 2 学 年	第 3 学 年	第 4 学 年	第 5 学 年	第 6 学 年
国語への関心・意欲・態度	国語に対する関心をもち、進んで表現したり、易しい読み物を楽しんで読んでほしいとする。	国語に対する関心をもち、進んで表現したり、いろいろな読み物を読みよるとする。	国語に対する関心をもち、進んで表現を工夫したり、いろいろな読み物を読みよるとする。	国語に関する関心をもち、進んで表現を工夫したり、読書の範囲を広げたりしようとする。	国語に対する関心をもち、進んで表現を工夫したり、読書を通して自分の考えを深めたりしようとする。	国語に対する関心をもち、進んで表現を工夫したり、適切な読み物を選んで自分の考えを深めたりしようとする。
表現の能力	自分の生活における話題や題材について考え、話をしたり文章を書く。	自分の生活における話題や題材について考え、順序を工夫して話をしたり文章を書く。	身近な生活における話題や題材について自分の考えをまとめ、要点や段落を考えて話をしたり文章を書く。	身近な生活における話題や題材について自分の考えをまとめ、要点や中心点を考えて話をしたり文章を書いたりする。	広い範囲にわたる話題や題材について自分の考えを深め、目的や相手に応じて話をしたり文章を書いたりする。	広い範囲にわたる話題や題材について自分の考えを深め、目的や相手に応じて話をしたり文章を書いたりする。
理解の能力	話や文章の表現に即して、話の粗筋をつかみ書かれている事柄の大体について理解する。	話や文章の表現に即して、話の事柄の順序を考え文章の場面様子の移り変わりに注意して理解する。	話や文章の構成に即して、自分の立場から、話の要点を押さえ文章の内容の要点を理解する。	話や文章の構成に即して、自分の立場から、話の要点や中心点を押さえ文章の段落相互の関係を考慮して理解する。	話や文章の構成に即して、自分の見方や考え方を広めながら、話の意図をつかみ文章の主題や要旨を理解する。	話や文章の構成に即して、自分の見方や考え方を広めながら、相手や目的に応じて話の意図をつかみ文章の主題や要旨を理解する。
言語についての知識・理解・技能	音声、文字、語句、文や文章、言葉遣いなどの国語について理解している。書写では、文字の形、筆順、点画を理解して文字を正しく書く。	音声、文字、語句、文や文章、言葉遣いなどの国語について理解している。書写では、点画の接し方、交わり方、方向を理解して文字を正しく書く。	音声、文字、語句、文や文章、言葉遣いなどの国語について正確に理解している。書写では、文字の組立方、毛筆では、点画の長短、運筆を理解して文字を正しく書く。	音声、文字、語句、文や文章、言葉遣いなどの国語について正確に理解している。書写では、文字の大きさ、配列、毛筆では、点画の接し方、交わり方、方向を理解して文字を正しく書く。	音声、文字、語句、文や文章、言葉遣いなどの国語について深く理解している。書写では、文字の大きさ、配列、毛筆では、文字の組立方を理解して文字を正しく書く。	音声、文字、語句、文や文章、言葉遣いなどの国語について基礎的な事項について深く理解している。書写では、文字の形、大きさ、配列、毛筆では、字配りを理解し文字を正しく書く。

小学校学習指導要領・目標（小学校国語）

〔第1学年〕

(1) 経験した事などが分かるように、順序を考えて話したり、文と文とを続けて簡単な文章を書いたりすることができるようにするとともに、進んで表現しようとする態度を育てる。

(2) 相手を確かみながら話を聞いたり、書かれている事柄の大体を理解しながら文章を読んだりすることができるようにするとともに、新しい読み物を楽しんで読もうとする態度を育てる。

〔第2学年〕

(1) 事柄の順序がはっきりするように、整理して話したり、話や文の続き方に注意して文章を書いたりすることができるようにするとともに、正しく表現しようとする態度を育てる。

(2) 事柄の順序を考えながら話を聞いたり、事柄の順序や場面の変化などに注意しながら文章を読んだりすることができるようにするとともに、新しい読み物を読んで読もうとする意欲を高める。

〔第3学年〕

(1) 表現する内容の要点が分かるように、区切りを考えて話したり、事柄ごとにまとまりのある簡単な構成の文章を書いたりすることができるようにするとともに、分かりやすく表現しようとする態度を育てる。

(2) 内容の要点を印さえながら話を聞いたり、内容の要点を正しく理解しながら文章を読んだりすることができるようにするとともに、いろいろな読み物を読もうとする態度を育てる。

〔第4学年〕

(1) 表現する内容の中心点が分かるように、筋道を立てて話したり、段落相互の関係などを考えて文章を書いたりすることができるようにするとともに、内容を整理しながら表現しようとする態度を育てる。

(2) 内容の要点や中心点を性格に押さえながら話を聞いたり、段落相互の関係を考えて中心点を正確に把握しながら文章を読んだりすることができるようにするとともに、読書の範囲を広げるようにする。

〔第5学年〕

(1) 主題や要旨のはっきりした表現をするため、意図や根拠を明らかにして話したり、全体の構成を考えて文章を書いたりすることができるようにするとともに、相手や場面の状況を考え表現しようとする態度を育てる。

(2) 話し手の意図をつかみながら聞いたり、主題や要旨を理解しながら文章を読んだりすることができるようにするとともに、読書を通して考えを深めるようにする。

〔第6学年〕

(1) 目的や意図に応じた表現をするため、全体を見通して適切に話したり、相立ての効果を考えて文章を書いたりすることができるようにするとともに、適切で効果的な表現をしようとする態度を育てる。

(2) 目的に応じて効果的に語を聞いたり、目的や文章の種類などに応じて正確な読み方で文章を読んだりすることができるようにするとともに、適切に読み物を読んで読む習慣をつける。

資料2 「観点別学習状況評価のための参考資料」と「小学校学習指導要領・目標」（小学校数学）

〔算 数〕小学校児童学習指導要録付属資料

観点	第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年
算数への関心 ・意識・態度	数量やものの形に親しみをもち、それらについて様々な経験をもち、それらをもととして、知識や技能を身に付けて活用し、進んで活用しようとする。	基礎的な数量や図形の性質や関係などについて様々な経験をもち、知識や技能を身に付けて活用し、進んで活用しようとする。	知識や技能などの有用さ、及び数量や図形の性質や関係などを理解し、筋道を立てて考えたり、進んで生活に生かそうとする。	知識や技能などの有用さ、及び数量や図形の性質や関係などを理解し、筋道を立てて考えたり、進んで生活に生かそうとする。	数量や図形の性質や関係などに着目して考察したり、論理的に思考し、進んで活用しようとする。	数量や図形の性質や関係などに着目して考察したり、論理的に思考し、進んで活用しようとする。
数学的な考え方	知識と技能の習得を通して、数理的な処理に親しむ。	知識と技能の習得を通して、数理的な処理に親しむ。	知識と技能の習得や活用を通して、数学的な考え方に基づき、筋道を立てて考える。	知識と技能の習得や活用を通して、数学的な考え方に基づき、筋道を立てて考える。	知識と技能の習得や活用を通して、数学的な考え方に基づき、筋道を立てて考える。	知識と技能の習得や活用を通して、数学的な考え方に基づき、筋道を立てて考える。
数量や図形について表現・処理	簡単な計算ができ、それらを用いると、身の大きさや物の形を比べたり、作り分けたりする。	簡単な計算ができ、それらを用いると、身の大きさや物の形を比べたり、作り分けたりする。	簡単な計算ができ、それらを用いると、身の大きさや物の形を比べたり、作り分けたりする。	簡単な計算ができ、それらを用いると、身の大きさや物の形を比べたり、作り分けたりする。	簡単な計算ができ、それらを用いると、身の大きさや物の形を比べたり、作り分けたりする。	簡単な計算ができ、それらを用いると、身の大きさや物の形を比べたり、作り分けたりする。
数量や図形について理解	数の概念や計算の意味を理解し、数量や図形との関係や性質を捉え、数量や図形を用いて問題を解決する。	数の概念や計算の意味を理解し、数量や図形との関係や性質を捉え、数量や図形を用いて問題を解決する。	数の意味や性質及び簡単な計算の意味や性質、図形の意味や性質、面積や長さの測定などについて理解し、数量や図形を用いて問題を解決する。	数の意味や性質及び簡単な計算の意味や性質、図形の意味や性質、面積や長さの測定などについて理解し、数量や図形を用いて問題を解決する。	数の意味や性質及び簡単な計算の意味や性質、図形の意味や性質、面積や長さの測定などについて理解し、数量や図形を用いて問題を解決する。	数の意味や性質及び簡単な計算の意味や性質、図形の意味や性質、面積や長さの測定などについて理解し、数量や図形を用いて問題を解決する。

小学校学習指導要領・目標（小学校算数）

〔第1学年〕

- (1) 具体的な操作などの活動を通して、数の概念や表し方について理解し、簡単な場合について、加法及び減法を用いることができるようにする。
- (2) 具体的な操作などの活動を通して、量の概念や測定についての理解の基礎となる経験を豊かにする。

- (3) 具体的な操作などの活動を通して、図形や空間についての理解の基礎となる経験を豊かにする。

〔第2学年〕

- (1) 具体的な操作などの活動を通して、数の概念や表し方についての理解を深めるようにする。また、加法、減法及び乗法について理解し、基礎的な計算ができるようにするとともに、それらを適切に用いることができるようにする。

- (2) 具体的な操作などの活動を通して、長さやかさなどの量の概念や測定について漸次理解できるようにする。

- (3) 図形を構成する要素に着目して、基本的な図形の概念について漸次理解できるようにする。

〔第3学年〕

- (1) 数直線を表すことに小数及び分数を用いることができるようにする。また、整数について乗法及び除法の意味を理解し、基礎的な計算ができるようにするとともに、それらの有用さが分かり、目的に応じて的確かつ能率的に用いることができるようにする。

- (2) 長さ、時間などの概念について理解するとともに、長さなどの基本的な量について目的に応じて単位や計器を適切に選んで測定できるようにする。

- (3) 基本的な図形についての理解を深め、図形を構成したり用いたりすることができるようにする。

- (4) 資料を整理したり、式やグラフを用いたりすることができるようにし、それらの有用さが分かり、数直線やその関係を表したり調べたりすることが漸次できるようにする。

〔第4学年〕

- (1) 整数、小数及び分数の表し方についての理解を深めるとともに、既知について理解し、目的に応じて用いることができるようにする。また、整数についての四則計算が確

数について加法及び減法を用いることができるようにする。

- (2) 面積の概念を理解し、簡単な図形について面積を求めることができるようにするとともに、角の大きさを測定することができるようにする。

- (3) 図形を構成要素及びそれらの位置関係に着目して考察し、基本的な平面図形についての理解を深めるとともに、基本的な立体図形やもの位置の表し方について理解できるようにする。

- (4) 数直線やその関係を表す式やグラフを用いて表したり考察したりすることができるようにするとともに、目的に応じて依存関係を調べたり分類整理したりすることができるようにする。

〔第5学年〕

- (1) 小数の乗法及び除法の意味について理解し、小数及び分数について計算できるようにするとともに、非象の考察に活用できるようにする。また、整数の概念についての理解を深めるようにする。

- (2) 基本的な平面図形の面積を求めることができるようにするとともに、体積の概念について理解し、簡単な立体図形の体積を求めることができるようにする。また、速さの概念及び測定値について理解できるようにする。

- (3) 合同の意味について理解し、基本的な図形を構成要素に着目して考察することができるようにする。

- (4) 文字などを用いて式を簡潔に表したり、式の表す数直線の関係を調べたりすることができるようにする。また、百分率や円グラフを用いるなど統計的な資料について考察することができるようにする。

〔第6学年〕

- (1) 分数の乗法及び除法の意味について理解し、それらを用いることができるようにするとともに、乗法及び除法についての理解を深めるようにする。

- (2) 基本的な立体図形の体積などを求めることができるようにする。また、計量の単位の仕組みについて知り、能率的に測定することができるようにする。

- (3) 図形を対称性などに着目して考察し、基本的な図形についての理解を一層深めるようにする。

- (4) 比例などの理解を通して関数の考えを深め、数直線の関係を考察することに有効に用いることができるようにする。また、資料の分布を調べると、統計的に考察したり表現したりすることができるようにする。